

神田外語大学紀要第 29 号
抜刷 2017 年

The Journal of Kanda University of International Studies Vol. 29 (2017)

ユリウス暦の閏日はいつか？

When is the leap day according to the Julian Calendar?

江 藤 一 郎

ユリウス暦の閏日はいつか？

When is the leap day according to the Julian Calendar?

江藤 一郎

Abstract

2016 is a leap year. In Spanish they call this year “año bisiesto” (literally, the year containing the double sixth day), because, by the Julian calendar, February 24 of the common year was called the sixth day, counting back from March 1, including this day. The Romans added a leap day after February 23, which was considered the end of the year according to the customs of that time. So the newly added day (now, February, 24) was called the second sixth day of February (día bisiesto). The dictionary Pequeño Larousse Ilustrado (1967) explains that February 25 is the sixth day from March 1 in the common year. This paper will prove that this explanation is wrong and it will show how it was taught to students.

0. 2016 年は、年号が 4 で割り切れるので閏年であり、オリンピック・イヤーである。英語では、閏年の 3 月 1 日以降の曜日が、前年の曜日より 1 日後に 1 つ飛ぶことから普通 *leap year* と呼ばれる¹。しかし、詳しく調べると、昔キリスト教の教会では、曜日は、A から G までのアルファベットで表し、その年の日曜日がいつも同じアルファベットで表せるようにしていた。主日の日 (*dominical, or Sunday, Letter of the Calendar*) と呼ばれる。閏日にはアルファベットを用いなかったのも、閏日が過ぎた 3 月以降は、日曜日を表すアルファベットが一つ前年より飛ぶというのが正確な表現であるらしい²。

¹ 中村 1, pp.278-279

² 井上, p.369// ホルフフォード・ストレブズ, pp.14-116

閏年は、スペイン語では *año bisiesto* と呼び、意味は、「3月1日から逆算して、6番目の日が2回ある年」である。英語では、大きな辞書だけが *bissextile* を記載している³。これはジュリアス・シーザーが行った古代ローマの暦の改革に基づく名称である。ロマンス語では、このように呼び、またロシア語もこれに倣っている。しかしこの語源を説明している、プティ・ラルスのスペイン語版 *Nuevo Pequeño Larousse Ilustrado*: Miguel de Toro y Gisbert, refundido y aumentado por Ramón García –Pelayo y Gross, 1967, Editorial Larousse, (p. 148)では、2月24日にあたる平年の *el sexto kalendas Martii* (3月1日から逆算して6日目) を2月25日にして、閏日はこの日を「6番目を2回」の日として間違えて記述しており、これは1967年以前に出版された1963年版(p.145)、1964年版(p.145)、その後出版された1976版(p.148)、1985年版(p.148) も同じ説明である⁴。1986年出版の *Pequeño Larousse en color* (p.148) にも同じ説明がある。閏日の間違いは語源辞典 Gómez de Silva (2009): *Breve Diccionario Etimológico de la Lengua Española* や Sandys, Edwin (1929): *A companion to Latin Studies*、wikipedia など、ほかにもあり、小論は、これらが間違いであることを証明する研究ノートである。

1. ユリウス暦の閏日はグレゴリオ暦の2月24日である。

Nuevo Pequeño Larousse Ilustrado: 1967 の問題の箇所を引用する。

El año así modificado recibió el nombre de *bisiesto*, porque según el cómputo romano el día 25 de febrero, que en los años ordinarios era el *sexto kalendas Martii*, se convertía en *bisexto kalendas Martii*. (bisiesto, p.148)

dominical letter : https://en.wikipedia.org/wiki/Dominical_letter, 2016.5.24, アクセス

³ 小稲義男編集, 1991, p. 216

⁴ 2016年版(Paris, México, 22版)を手に入れたところ、*bisiesto*の語源説明はすべて削除されていた(p.157)。2001年版(Barcelona, p.159)、2006年版(Barcelona, p.159)でも、すでに削除されていた。同じ1967年に出版されたフランス語の *Petit Larousse*, Paris (p.123, *bissextile*) には、スペイン語版にある語源の記述はない。

（このように変更された年は *bisiesto*（2 回目の 6 番目の日）と呼ばれ、ローマの数え方によれば、2 月 25 日は、平年の *sexto kalendas Martii*「3 月 1 日から数えて 6 番目の日」であり、それが、閏年には 3 月の 1 日から逆算して、*bisexto*（2 回目の 6 番目の日）になっていた。）

Larousse の説明では、平年の 2 月 25 日が、3 月の 1 日から数えて 6 日目で、これが閏年になると、2 回目の 6 日目になるとしているが、間違いである。資料としてあげる、この小論の最後のページにある、古代ローマと現代の西暦の月日を並べたカレンダー⁵を見ると、平年（右から 2 つ目の段、*Febrero común. 28 días*）では、3 月 1 日から数えて 6 日目は、24 日であり、25 日ではない。また『新ラテン文法』（松平、国原共著）のユリウス暦一覧表でも、平年の 2 月 24 日が a.d.VI となっている⁶。まず、これを理解するためには、古代ローマの暦を説明せねばならないだろう。これには、『ラテン語四ヶ年』⁷の必要箇所を引用しよう。

241.a) 一月の日数を数えるには、これを三つに分けるが、月の主な日は次三つであった。

- 1) *Kalendae, arum* (f) 一日
- 2) *Nonae, arum* (f) 五日
- 3) *Idus, uum*(f) 十三日

しかし、三月、五月、七月、十月の *Nonae* と *Idus* は二日おそくなつて、それぞれ七日目と十五日目に當っていた。

3 つの基準日（参考日）は月の満ち欠けと関係があり、*Kalendas* は新月(*la luna nueva*) に当たり、*Nonas* は上弦の月(*cuarto creciente*)、*Idus* は満月と関係があるとされる⁸。Gómez de Silva の語源辞典にも次のような記述がある。

⁵ Penagos, p.8

⁶ 松平、国原, p.351（3 月 1 日から数えて 6 日目）と言う意味

⁷ デルコル, pp.256-258

⁸ http://aliso.pntic.mec.es/agalle17/cultura_clasica/calendario/division%20mes.htm : 2016.4.27 アクセス ; el calendario romano (II)

Las calendas eran el día de la luna nueva y primer día del mes de los antiguos romanos; desde ellas, se contaban los días hacia atrás hasta los idus, o día de luna llena. (p.112)

Kalendas は毎月1日を意味して、その日に借金やその利子の回収をしていたので、その日に開く利子台帳を *calendar* と言い、そして会計簿の意味から月日を知らせる暦の意味になった⁹。Nonas は上弦の月だが、英語の *wikipedia* では、Nonas は上弦の月ではなく、nonas は9番目の *nonus* と関係があり、Idus を入れて逆算する9日目ごとに行われる市の日だと解釈している¹⁰。

上弦の月にあたるスペイン語の *luna creciente* の *creciente* はフランス語の *croissant* (三日月) にあたり、これはパンの名前のクロワサンの語源と言われる。上弦の半月と三日月の厳密な違いはないと思われる。オスマン・トルコの国旗に由来するトルコの国旗の説明を見ると、*luna menguante* とあるので、これは下弦の月にあたるので、欠けるのが右か左かの月の形は意識されずに使われたらしい。三日月のクロワサンを南米のアルゼンチン、ウルグアイなどでは、*media luna* (半月) と呼んでいるらしい¹¹。

Idus は、3, 5, 7, 10月で15日を指す基準日なので、語源は『分かれる』と説明される¹²こともあるが、Ernout et Meillet のラテン語語源辞典を調べると語源は「満月で輝く」と意味と関係があるらしい¹³。これは一月を半分に分けて、太陰

⁹ 小川, p.72 // 寺澤主幹, p.186//Gómez de Silva, p.129, *calendario*

¹⁰ https://en.wikipedia.org/wiki/Leap_year 2016.5.14 アクセス

¹¹ <https://es.wikipedia.org/wiki/Cruas%C3%A1n> : 2016.4.27 アクセス

Cruasán: El cruasán (del francés *croissant*, AFI: [kʁwa'sɑ̃], “creciente”), también escrito abundantemente en su grafía sin adaptar *croissant*, conocido como cachitos en Venezuela, medialunas en Argentina, Uruguay y Chile y, ...

Etimología : *Croissant* en francés quiere decir *creciente*, en el sentido de “cuarto creciente lunar” (*fase creciente*) y se refiere a la forma del bollo,

¹² NationalGraphic :2012.3.5:http://natgeo.nikkeibp.co.jp/nng/article/news/14/5791/?ST=m_news: 2016.5.19 アクセス(日本版)

¹³ Ernout et Meillet, pp. 306-307

暦で考えると満月にあたる¹⁴。ローマ歴では、3, 5, 7, 10 月では、15 日を指し、その他の月では 13 日を表す。

ジュリアス・シーザーが 3 月 15 日に暗殺され日を、スペイン語では LOS IDUS DE MARZO と言う。Thornton Wilder が著した本 *Ides of March* (1948) のスペイン語訳の題名でもある¹⁵。また、Idus は英語の Ides にあたり、シェイクスピアの「ジュリアス・シーザー」の中で、予言者がシーザーに言う言葉：Beware the Ides of March (三月の十五日に気をつけなされ。)は有名である¹⁶。2011 年のアメリカ合衆国の政治ドラマ映画で 2012 年に日本で公開された映画“スーパー・チューズデー〜正義を売った日”の原題は THE IDES OF MARCH である¹⁷。

そして、ローマ暦の最大の特徴は、基準日から逆算することである。1 月 31 日は、^{ついたち}一日の前の日、Pridie Kalendas Februarias (pri.Kal.febr.) と呼び¹⁸、1 月 30 日を、^{ついたち}2 月一日から数えて 3 日目、tertium と呼ぶ。1 月の 25 日ならば、2 月 1 日から数えて、1 月 25 日は 8 日目にあたるので、ante diem octavum Kalendas Februarias と呼ぶ。

2. a 基準時（参照時）から逆算表現する表現

基準時というか参照時から、逆算するやり方で、いちばん有名なのは、大晦日の新年を迎えるカウントダウン方式であろう。また、ロケット発射の時もカウントダウンする。この数え方は、現代の欧米での時刻の表わし方と共通する。たとえばスペイン語では、4 時 15 分前は、Son las cuatro menos cuarto. (4 時に 15 分足りない時刻)、中南米では Falta un cuarto para las cuatro. (4 時まで 15 分欠ける時刻)と表す。英語でも It's a quarter to four. (4 時まで 15 分) という言い方がある。興

¹⁴ National Graphic 日本版:2012.3.5, op.cit

¹⁵ スペイン語訳, *Los Idus de Marzo*, EDHASA, Barcelona, 1990

¹⁶ シェイクスピア(1612 年出版) 大場健治編注訳, pp.16-17

¹⁷ 映画パンフ：発行：松竹, 2012, 3, 31,

¹⁸ コルデル, p.240

味深いのは、ドイツ語で¹⁹、長針が向かう~時（正時）が参照点となり、3 時 15 分は英語(It is a quarter after three.) のように、Es is Viertel nach drei.とも言えるが、Es ist Viertel vier. (4 時に向かって 15 分)とも言い、3 時半は Es is halb vier. (4 時に向かって半時間)、4 時 15 分前は、英語(It is a quarter before four.) のように Es ist Viertel vor vier. (4 時前 15 分)とも言えるが、Es ist drei Viertel vier. (4 時 15 分前、4 時に向かって 15 分が 3 つ) とも言う。そして、スペインのカタルーニャ語²⁰はドイツ語のように、3 時何分と言いたい時は、“すべて 4 時台の”と表現する。即ち、3 時 15 分は És un quart de quatre. (4 時に向かって 15 分)、3 時半は、Són dos quarts de quatre. (4 時に向かって 15 分が 2 つ過ぎ)、4 時 15 分前は Són tres quarts de quatre. (4 時に向かって 15 分が 3 つ)と表現する。ロシア語²¹も序数詞を用いる表現では、カタルーニャ語と同じである。

2. b 基準日（参照日）を含めて数える表現

基準日というか参照時を含めて数える表現法が、スペイン語にある。一週間前は、その表現をする日も入れて数えて、hace ocho días (8 日前)、2 週間前も 14 日前ではなく、15 日前 hace quince días と言う。フランス語でも、il y a huit jours, il y a quinze jours と言う。一週間後は、8 日後で、スペイン語では dentro de ocho días と言う。

また、この基準日、即ちその最初の日（植木算の最初の木）を数にいれて計算する方法は、日本の昔の年齢の数え方に似ている。即ち満年齢でなく、数え年である。生まれた時に 1 歳と数えて、年があけた 1 月 1 日に「数え 2 歳」になる数え方である。また人が亡くなってから 2 年目を三回忌と言うのも、輪廻転生という考え方から、亡くなった日が 1 回目の忌日、丸 1 年目が 2 回目の忌日、丸 2 年

¹⁹ 佐々木, pp. 256-257 // 藤田, pp.185-187

²⁰ 田沢, p.197, p.200

²¹ 和久利, p.251

目が三回忌とか三周忌と言うらしい。

また、基準日と関係あるかどうかかわからないが、日本の「妊娠何か月」も欧米とは一か月ずれている。日本では妊娠してから十月十日で、子供が生まれるとするが、欧米では、九ヶ月である²²。これは日本と欧米では妊娠月は、1ヶ月のずれが出る²³。

白水社の『和西辞典』(1979, p.833)の「妊娠」の項を引くと

～7か月の *embarazada de seis meses* 《日本とは数え方が異なる》

とあり、スペイン語の妊娠六ヶ月(*seis meses*)の訳を1ヶ月加えて7ヶ月にしている。

2. c 基準とした(表現された)数を入れて数えるかどうか？

表現された基準の数を入れて数えるか、入れないで数えるかは、英語の *more than*, *less than* を思い出させる²⁴。He has more than ten cats. は11匹以上猫がいな
いといけない。英語では、日本語の13歳以上という表現は、Only children aged 13
and over can participate in this program.のように、数に *and over* を付けたりする。ま
た *less than ten* は日本語で「10以下」と訳すと10の数を含む表現で、英語はその
数を含まないの、日本語では「未満」で訳さなくてはならない。*under* にして
もいい。Persons under the age of 18 years are not permitted. 以下にしたい場合は、*of*
five years or under とすると、「5歳かそれ以下」となる。*and less*, *and fewer* を数の
次につけて表現してもよい。You don't need a reservation when you are six and fewer.

²² 「9ヶ月」(Nine months)という出産前の9ヶ月をテーマにしたアメリカ映画がある。映画パンフ、1995,12,23, 東宝

²³ 日本では最終月経の1日目から約280日間、すなわち10か月と考えるのに対し、英米では排卵日から数えて266日間、すなわち9ヶ月と考える。特に妊娠初期では月より週で数えるのが普通)
<http://oshiete.goo.ne.jp/qa/3926593.html>2016,6,11 アクセス

²⁴ 宮川他, p. 322

スペイン語の *más de*, *menos de* も英語の表現と同じである。スペイン語でも、次に表される数は含まれないが、日本語はその数が含まれる²⁵。Tengo *más de cinco libros*. は、直訳では「私は 5 冊以上の本を持っている。」だが、実際は「6 冊以上」持っていないと、この表現はできない。日本語では、「本を 5 冊以上持っている」と言う場合は、5 冊あれば、この表現ができるが、スペイン語では、5 は数にはいらず、6 冊ないと成立しない表現である。「2 人以上」は *dos o más personas*、
「5 歳以上の子供」は *niños de cinco o más años*. のように、数 + *más* で表す²⁶。「学生数が 5 人以下の場合は、授業は開講されない」という表現を、*La clase no se da, si hay menos de cinco alumnos*. とすると、スペイン語では「5」が含まれないので、授業開講に 6 人必要ならば、*menos de seis alumnos* となる。「5 人以下」は、日本語では 5 が含まれるが、スペイン語の *menos de cinco* は 5 を含まないので、日本語では「5 人未満の学生」の訳になる。年齢表現での *menores de* は日本語の「未満」に当たり、18 歳未満禁止の映画は、*película prohibida para menores de 18 años* と言う。「以下」を表現したい場合、スペイン語では、「5 人以下」*cinco o menos personas*、「100 ユーロ以下の商品：artículo de 100 euros o menos」のように表現する²⁷。

3. 古代ローマの平年の 2 月 24 日

この日の表わし方は、13 日を過ぎているので、*Nonas* ではなく、次の月、3 月の 1 日から逆算して表す。3 月 1 日が出発点である。現代の平年の 2 月 28 日は、当時のラテン語では、*Pridie Kalendas Martias* (3 月 1 日の前日) と表現する。前日は *pridie* + 対格で表し²⁸、1 日から数えて 2 日目とは言わない。その前日の 2 月 27 日になって初めて数詞を使い、*III Kalendas Martias*. (3 月の 1 日から数えて 3 日

²⁵ 高橋, pp. 16-18

²⁶ 小池他, p.46

²⁷ *ibid.*, p. 38

²⁸ コルデル, p. 256

目)と表現する。すると、24日はVI Kalendas Martiasとなる。閏年は、現代の29日に当たる日がPridie Kalendas Martiasになるので、一つずつずれて、現代の2月25日が3月1日から数えて、6番目の日になり、この日がVI Kal. Mar. (sextum)になる。現代からすると、その次の日は、逆算しているので、平年の2月24日になり、これをまた同じ「6番目」にするので、閏年の2月24日が「2回目の6番目の日」というBis VI Kal. Mar. (ante diem bis sextum Kalendas Martias)になるのである。以下、辞書、専門書とかwikipediaなどのbisiestoの記述を検討する。

3.1.a Larousse Pequeño Ilustrado” (1967, p.148) (1で言及した辞典)

según el cómputo romano el día 25 de febrero,” que en los años ordinarios era el *sexto kalendas Martii*, se convertía en *bisexto kalendas Martii*.

2月25日が、平年のsexto kalendas Martiiに当たると記述しているが、これは間違いで、24日にすべきである。閏年では、現代の25日に当たる日がsexto díaだが、当時のローマ人はそのような考え方ではなく、2月29日はなく、23日の次の日に閏日を入れたので、閏日は24日、即ちsexto díaが2回あると、その頃は考えていたはずである。なお、月の名前がラルールでは属格になっているが、普通は対格である。

『ラテン語四ヶ年』²⁹ は次のように説明している。24日の次というのは逆算しているので、現在では、23日と24日の間と解釈できる。

閏年には餘日を二月二十四日(a. d. VI Kal. Mart.)の次に入れて、ante diem **bis sextum** Kal. Mart. と云い、それがために閏年もbisextus (又はbissextilis)と云うのであった。

²⁹ コルデル, p.257

中山恒夫『古典ラテン語文典』(p.409) は次のように説明している。

(3) 2月29日は存在しない。閏年には2月24日を2日続けることで、その2日目を閏日(dies intercalaris)にする。このために閏年は *annus bissextilis* と呼ばれる。

ante diem bis sextum kalendas Martias (a.d.bis VI Kal. Mart.) 3月1日の前6日目の2回目、
2月の閏24日

研究社の『大英和辞典』(第5版)の *bissextus* の語彙説明でも、2月24日としている³⁰。

ユリウス暦では閏年に3月1日の6日前の日、つまり2月24日を繰り返したことから

3.1.b Breve Diccionario Etimológico de la lengua española (Gómez de Silva)

bisiesto (p.112) の説明におかしい所がある。

El sexto día antes de las kalendas sería el moderno 23 o 24 de febrero.³¹

平年でも閏年でも現在の2月23日はローマ暦では VII Kal.(*ante diem septimum ante Kalendas Martias, séptimo día*) あり、24日は平年では VI Kal. (*sexto día*) ので、こちらの記述は正しい。

3.1.c A companion to Latin Studies (Sandys, p.100)

記述がおかしいのは以下の所である。

The day which was to be added to the year *quarto quoque anno*, was interjected between Feb. 23 and Feb.24. As Feb. 23 was *a.d. bis VI. Cal. Mart.*, and by a curious error came to be known as *bissextum* (Censor. xx10) or later still as *bissextus*; but

³⁰ 小稲, op.cit. p. 216

³¹ Gómez de Silva, 1985, 英語版, (p.78) The sixth day before the calends of March would be the modern 23 or 24 February.

some ancients regarded bissextum as a two day space, consisting of Feb. 23 plus the new day (Digest).

納得できないのは、2月23日を、a.d. bis VI. Cal. Mart.としたことで、これは「2回目の6番目の日」で閏日を指しているが、23日が閏日ではなく、24日なので、間違えている。閏日は24日を2回繰り返すので、23日と24日の間にいれるという解釈は成り立つが、閏日は24日である。「23日プラス新しい1日」(Feb. 23 plus the new day)と記述しているが、これは、平年の24日プラス新しい一日、すなわち24日をもう一度繰り返したのであり、この記述もおかしい。

3.1.d.1. *Diccionario del origen de las palabras* (Buitrago & Torijano, p.52)

es decir, ‘dos veces el sexto’ porque antiguamente se repetía un día entre el 24 y el 25 de febrereo.

3.1.d.2. *Breve Diccionario Etimológico de la lengua castellana* (Corominas, p. 97)

BISIESTO, h. 1250. Del lat. BISEXTUS ‘día que en los años bisietos se agregaba entre el 24 y el 25 de febrero, ‘compuesto de BIS ‘dos veces’ y SEXTUS ‘sexto’, por ir detrás del 24 de febrero, que, según el cómputo latino, era el día sexto de las calendas de marzo.

上の2冊は、24日が2回となるので結果的には正しいが、24日と25日の間と閏日を入れると記述しているのはおかしい。

3. 2 フランス語版 wikipedia

2月23日を2度数える日と間違って記述している（下線筆者）。

Ce jour « additionnel » se plaçait juste avant le 24 février. Il s'agissait donc d'un « 23 février bis ».

On nommait le 24 février a. d. VI Kal. Mart., soit ante diem sextum Kalendas Martias, ce qui signifie « le sixième jour avant les calendes de mars » (les Romains comptaient les jours à rebours, bornes incluses, à partir de trois dates de référence présentes dans chaque mois, à savoir les calendes, le 1^{er} du mois, les ides, le 13 ou le 15 selon les mois, et les nones, neuf jours bornes

incluses avant les ides, comme leur nom l'indique, c'est-à-dire le 5 ou le 7) ; le « 23 février bis » se disait donc tout naturellement a.d. bis VI Kal.Mart., soit ante diem bis sextum Kalendas Martias : « le sixième jour bis avant les calendes (le premier jour) de mars ». ³²

まず、平年の 24 日が ante diem sextum Kalendas Martias と「3 月 1 日から数えて 6 日目」としているのは正しいが、その前日の 23 日を閏日としているところ（引用の下線部）が間違えである。あくまでも 3 月 1 日から逆算しているので、24 日の前日は 23 日でなく、25 日が最初の 6 番目の日になるのである。

スペイン語版の wikipedia³³の記述は正しい。23 日と 24 日の間に閏日をいれたとある。24 日の後の日とは逆算しているので、23 日と 24 日の間になる。

Año bisiesto es una expresión que deriva del latín *bis sextus dies ante kalendas martii* (repítase el sexto día antes del primer día del mes de marzo), que correspondía a un día extra intercalado entre el 23 y el 24 de febrero por Julio César. ...

(Historia del año bisiesto).... de modo que el 24 de febrero sería el 6º día antes de las kalendas de marzo (*ante diem sextum kalendas martias*). La reforma de Julio César añadió un día tras el 24 de febrero. Con el tiempo continuó llamándose Bi-sextum o bisiesto, aunque se añadiera el día extra tras el último día de febrero.

英語の wikipedia³⁴の説明も正しく 2 月 24 日を 6 番目が 2 度目としている。

To create the intercalary day, the existing *ante diem sextum Kalendas Martias* (February 24) was doubled, producing *ante diem bis sextum Kalendas Martias*. Hence, the year containing the doubled day was a bissextile (*bis sextum*, "twice sixth") year.

³² https://fr.wikipedia.org/wiki/Ann%C3%A9e_bissextile 2016.5.12 アクセス

³³ https://es.wikipedia.org/wiki/A%C3%B1o_bisiesto: 2016.5.12 アクセス

³⁴ [wikipedia \(https://en.wikipedia.org/wiki/Leap_year\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Leap_year): 2016.5.14 アクセス)

3. 3 3.1.a で挙げた『ラテン語 4 ヲ年』と『古典ラテン語文典』のほかに以下の5冊も24日を「2回目の6番目」と正しく説明している。

- a. *Guide Romain Antique* (Hacquard, J.Dautry et O.Maisani, pp.86-87)

Le 24 février se disant : a.d.VI Kal. Mart., on nommera el 24 février **bis** ;

bis sextum (d'où notre mot : année **bissextile**).

- b. *Handbook of Dates for students of English History* (C. R. Cheney, p.76)

Common years VI Kal. Mar. 24 February

Leap Years Bis VI Kal. Mar. 24 February

- c. 『暦と占いの科学』(永田, pp.116-117)

四年ごとに二月二十三日と二十四日の間に《リープ・ディ 閏日》をいれた。ところで、この二月二十四日というのはローマ流に呼ぶと、《カレンダエ六日前》ということになる。それゆえ、その前に入る閏日は、《もう一つの六日前》という意味で《二度目の六日前》bisextum と呼ばれたのである。

- d. 『フランス語 語源こぼれ話』(田桐, p. 87)

閏日は、2月24日をダブらせた日あった。2月24日は「3月ついたちの6日前の日」である。これの前に、「ダブった」、つまり「2度目の」意味をあらわす bis をつけて

4. el día bisiesto の教え方 (閏日と昼寝)

まず、bisiesto の語源を教えるが、bis はラテン語の倍数の表現で、「2倍」の意味で、音楽の繰り返しは bis と書かれる。そして、接頭辞では、bi となり、英語の bicycle とか bilingual として使われていることを教える。そして、次に siesto は男性形で、女性形は siesta でスペイン語のシエスタ、昼寝の語源であり、序数の sexto と関係があり、siesta はラテン語の hora sexta から来ている³⁵と教える。古代ローマの時刻表現は、日本の江戸時代のように不定時法である。すなわち、日の出と日の入りを12等分、夜は日没から日の出までの時間を12等分にしたので、

³⁵ Buitrago & Torijano, p. 447

夏と冬ではかなり時間が違ってくる。昼寝に関係ある夏時間で考えると、日の出を朝 6 時にすると、ラテン語の第一時は *hora prima* になり、*hora sexta* は午前 11 時から 12 時をさす³⁶。この時間帯が地中海では暑さが一番大きくなり、仕事を離れて昼寝を取ったと思えるが、スペインでは、昼食が 1 時半頃から 3 時頃までになったので、*sexta* からできた *siesta* が 3 時頃から 5 時頃までの昼寝の時間を指すようになった。古代のローマの時間が現代とずれる例がもうひとつある。それは、英語の *noon* であるが、これは古代ローマの第九時 *hora nona* から来ている。これは、午後 2 時から 3 時までを指しており、この *nona* に行われるキリスト教の儀式があったが、1200 年頃から、祈祷日課や食事の時刻の繰り上げに応じて、*noon* を「正午」と言うようになったようである³⁷。

5. なぜ 2 月 28 日の後ではなく、23 日に閏日をいれたのか？

これまで色々して調べてきたが、この問いに答えてくれる本は現在まで 3 冊しか見つかっていない。一冊は永田久『暦と占いの科学』(pp.109-110) であるが、この説明によると、ヌマ暦 (B.C710) では、現在の 3 月にあたる月が年の初めで、それゆえ、3 月から数えて 7 番目(*septimus*) の月が *September* (7 番目の月)、8 番目 (*octavus*) の月が現在の 10 月 *October* (音楽用語のオクターヴ、英語の蛸 *octopus* と関係ある) に当たる。11 月も 9 番目、12 月も 10 番目と関係がある。後に、現在の 1 月(*januarius*) 2 月 (*februarius*) を加えたので、一年の終りが現在の 2 月にあたる *februarius* であった。そして、最初は 2 月 23 日が一年の終わりで、テルミナリア”*Terminalia*”と呼ばれる、ローマ帝国の国境をつかさどる神テルミヌスを祝う祭りがあった。この日が年の最終月の最終日と考えられていたので、その次の日に閏日を加えたと説明している。3.3.d で引用した田桐正彦は別の章で、次のように書いている。

³⁶ Cobarrubias, p.938, SIESTA. ...; dixose de la hora sexta que es el medio día

³⁷ 上野, pp.15-151 // 寺澤主幹編集, p. 960

ユリウス暦の閏日はいつか？

閏月の伝統にのっとり、フェブルアーリス 23 日のテルミナーリア祭 Terminalia の直後に閏日をおいたのである。「消えた 10 日間³⁸」

もう一冊は、Sandys³⁹である。

Hence we speak of the year with the added day as ‘bissextile’. Even in the Gregorian Calendar the added day is assumed to be Feb.24, not Feb.29, because the festival of S. Mattia’s is in leap –year changes from Feb.24 to Feb.25.

グレゴリオ暦になって、閏日は、24 日ではなく、28 日の次に 29 日として付け加えられたのだが、国によっては、前日 (pridie) が 28 日なのか 29 日かわからなくなるので、24 日をもう一度繰り返したらしい⁴⁰。Sandy は聖マティヤの日⁴¹がいつもは 2 月 24 日なのだが、閏年には 25 日に変わったと説明している。

6. ユリウス暦とグレゴリオ暦

閏日が現在のように 28 日の次の 29 日のおかれるようになったのは、ローマ法王グレゴリオ 13 世が 1582 年の 10 月 4 日の翌日を新暦の 10 月 15 日にして、春分の日を 3 月 21 日にして、復活祭を行ったことによるが、この翌年の 1583 年、日本の天正少年使節はインドのゴアにおいて、1585 年 3 月 23 日にローマ教皇グレゴリオ 13 世にヴァチカンで謁見するのであった。

イギリスでは、1752 年の 9 月にグレゴリオ暦を採用したので、それ以前に亡くなったシェイクスピアの命日はユリウス暦で表している。それ故、セルバンテスの命日とシェイクスピアの命日は同年同月同日、すなわち、1616 年 3 月 23 日になっているが、グレゴリオ暦ではシェイクスピアの命日は 11 日ぐらい後の 5 月 3 日

³⁸ 田桐, p.86

³⁹ Sandys, p. 100

⁴⁰ <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%96%8F%E6%97%A5#.E6.AC.A7.E7.B1.B3> :2016,7,28 アクセス

⁴¹ カイトリー, p.38

である⁴²。また、コロンブスが 1492 年 10 月 12 日に西インド諸島のエスパニョラ島に達したので、この日を記念して、スペインや中南米ではこの日を祝祭日(Fiesta Nacional de España) にしている。かつてはスペインでは Día de la Hispanidad (イスパニア文化の日) とか、中南米では Día de la Raza (民族の日) とよく呼ばれたが⁴³、この日はグレゴリオ暦では、10 月 21 日か 22 日ごろに当たるはずである⁴⁴。

付記

1. うるう年のプロポーズ : leap year proposal

イギリスのスコットランドには、閏年には、女性から結婚を申し込んでも良いという考えがあった。断れても絹のガウンをもらうことになっていた⁴⁵。この習慣は 13 世紀からあったようだが、今でもアイルランドにはこの言い伝えが残っているらしく、2010 年にこのことを題材にした映画 ”Leap Year” (原題)「リープ・イヤー うるう年のプロポーズ」(邦題)というアメリカ・アイルランド合作映画が作られている⁴⁶。

2. スペイン語の写本を読む者として、スペイン紀元 (ローマ人によるスペイン征服のあった紀元前 38 年を起点とし、一年が復活祭からはじまる) が今の西暦とは違うことを考えなくてはならない。つまり、写本の年号から、38 年を引いたのが、現在の西暦の年号である⁴⁷。例えば、「わがシッドの詩」の最後に写本を写したペール・アバットが 1245 年と記しているが、西暦では 38 年引いた 1207 年のことである⁴⁸。コリン・スミスの校訂版の *Poema de Mio Cid* (edición de Colin Smith,

⁴² 樺山, p.501

⁴³ 立石(2004: pp. 95-96) // 立石(2005: pp. 188-213)

⁴⁴ http://3rd.geocities.jp/jcon_tline/02/n/1/4/9/2/n1492.html:2016,8,8 アクセス

⁴⁵ 福原、岩崎監修, p.583 // ブルーワー, p.1013

⁴⁶ <http://eiga.com/movie/55194/>, 2016,7,5 アクセス

⁴⁷ プラスティン, p.96

⁴⁸ Menéndez Pidal, p.13

Cátedra, 1977, p.270 v3730 の下) の最後の部分とその注が参考となる。

Quien escribio este libro ¡del Dios paraíso , amen!

Per Abbat le escribio en el mes de mayo

en era de mill e. cc xlv. años

nota: ... La fecha que aparece es 1245 de nuestra Era, esto es, año de Cristo 1207. En el espacio indicado arriba, MP (Menéndez Pidal) cree que había originalmente otra C (borrada más tarde), lo que daría Era 1345= 1307 a. C.

参考文献 I (Larousse)

Pequeño Larousse Ilustrado, 1963, Diccionario Enciclopédico publicado bajo la dirección de Claude y Paul Augé, adaptación española de Miguel de Toro y Gisbert París, 13ª tirada

_____, 1964, Diccionario Enciclopédico publicado bajo la dirección de Claude y Paul Augé, adaptación española de Miguel de Toro y Gisbert, Buenos Aires, 43 edición

_____, 1967, Miguel de Toro y Gisbert, refundido y aumentado por Ramón y Gross, París

_____, 1976, Ramón García –Pelayo y Gross, París

_____, 1985, Ramón García –Pelayo y Gross, Barcelona

_____, 2001, Equipo Editorial, dirección Marta Bueno, Barcelona

_____, 2006, Barcelona, México

_____, 2016, Barcelona, México

Pequeño Larousse en color, 1986, Ramón García-Pelayo y Gross, Barcelona

Petit Larousse, 1967, París

参考文献 Ⅱ

- ブアステイン・ダニエル (Boorstin, Daniel J.) (1991): 『西暦はどうやって決まったか』 (大発見 5), 集英社文庫
- ブルーワー(Brewer) (1994): 『英語故事成語大辞典』 大修館
- Buitrago, Alberto & Torijano, J. Agustín (1998): *Diccionario del origen de las palabras*, Espasa
- Cheney, C.R. (editor) (1981): *Handbook of dates for students of English History* (Royal Historical Society Guides and handbooks No. 4) Offices of Royal Historical Society, London, Cambridge University Press
- Cobarrubias, Sebastián (1611): *Tesoro de la Lengua Castellana o Española*, Turner, Madrid, (1979)
- Corominas, Joan (1987) : *Breve Diccionario Etimológico de la lengua castellana*, Madrid, Gredos
- デルコル(Del Col, Aloysius) Aloysius(1968): 『ラテン語四ヶ年』 ドン・ボスコ社
- Ernout et Meillet (1967): *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, Paris, Klincksieck
- 藤田五郎(1992) 『英語からドイツ語へ』 第三書房
- 福原麟太郎、岩崎民平監修(1964): 『基本英語百科事典』 研究社
- Gómez de Silva, Guido (1985): *Elsevier's Concise Spanish Etymological Dictionary*, Amsterdam, Elsevier
- (2009): *Breve Diccionario Etimológico de la lengua española*, México, Fondo de Cultura Económica
- Hacquard, Georges, J.Dautry et O.Maisani (1985) : *Guide Romain Antique*, Classiques Hachette, Paris, Hachette
- ホルフフォード・ストレブンス(Holford – Strevens)(2013): 『暦と時間の歴史』 (正宗聡訳) 丸善

- 井上義昌編(1976):『英米故事伝説辞典』 富山房
- 樺山紘一他編(1994)『クロニク世界全史』 講談社
- カイトリー・チャールズ (Charles Kightly) (1995):『イギリス歳時記』 大修館
- 小池和良他(2014):『和西辞典』 小学館
- 小稲義男編集代表(1991):『新英和大辞典』(第5版) 研究社
- 松平千秋、国原吉之助(1997):『新ラテン文法』 東洋出版
- 宮川幸久他(1988):『ロイヤル英文法』 旺文社
- 宮城昇、エンリーケ・コントレーラス監修(1979):『和西辞典』 白水社
- Menéndea Pidal, Ramón (1964): *Cantar de Mio Cid*, volume I, (Obras de R. Menéndez Pidal, tomo III), Madrid, Espasa-Calpe
- 永田久(1983):『暦と占いの科学』 新潮社
- 中村徳次(1991):『いんぐりっしゅ散歩』 北星堂
- 小川芳男編(1985):『ハンディ語源英和辞典』 有精堂
- Penagos, Luis (1970): *Gramática Latina*, Biblioteca comillensis, Santander, Sal Terrae
- Poema de Mio Cid* (1977): edición de Colin Smith, Cátedra
- Sandys, Edwin (1929): *A companion to Latin Studies*, Cambridge
- 佐々木庸一(1991):『新英語から入るドイツ語』 郁文堂
- シェイクスピア『ジュリアス・シーザー』(2005): (シェイクスピア選集, 大場健治編注訳) 研究社 1612 年作
- 田桐正彦 (1988):『フランス語 語源こぼれ話』 白水社
- 高橋覚二(1998):『スペイン語表現ハンドブック』 白水社
- 立石博高 (2004):『スペイン歴史散歩』 行路社
- _____, (2005):「帝国の記憶とスペイン国民国家」 松本彰・立石博高編『国民国家と帝国』 山川出版社, pp. 188-203
- 田沢耕 (1991):『カタルーニャ語文法入門』 大学書林
- 寺澤芳雄主幹(1997):『英語語源辞典』 研究社

上野景福(1985):『英単語ものがたり』日本英語教育協会

和久利誓一(1962):『ロシア語四週間』大学書林

Wilder , Thornton(1990): *Los Idus de marzo* , (The Ides of March, traducción de María Martínez Sierra) Barcelona, Edhasa

ユリウス暦の閏日はいつか？

	Enero, Agosto, Diciembre. 31 días	Marzo, Mayo, Julio, Octubre. 31 días	Abril, Junio, Septiembre, Noviembre. 30 días	Febrero común. 28 días	Febrero bisiesto. 29 días
1	<i>caléndis</i>	<i>caléndis</i>	<i>caléndis</i>	<i>caléndis</i>	<i>caléndis.</i>
2	4 nonas.	6 nonas	4 nonas.	4 nonas.	4 nonas.
3	3 non.	5 non.	3 non.	3 non.	3 non.
4	pridie non.	4 non.	pridie non.	pridienon.	pridie non.
5	<i>nonis</i>	3 non.	<i>nonis</i>	<i>nonis</i>	<i>nonis</i>
6	8 idus.	pridie non.	8 idus.	8 idus.	8 idus.
7	7 idus.	<i>nonis</i>	7 idus.	7 idus.	7 idus.
8	6 idus.	8 idus.	6 idus.	6 idus.	6 idus.
9	5 idus.	7 idus.	5 idus.	5 idus.	5 idus.
10	4 idus.	6 idus.	4 idus.	4 idus.	4 idus.
11	3 idus.	5 idus.	3 idus.	3 idus.	3 idus.
12	pridie idus.	4 idus.	pridie idus.	pridie idus.	pridie idus.
13	<i>idibus.</i>	3 idus.	<i>idibus.</i>	<i>idibus</i>	<i>idibus</i>
14	19 calénd.	pridie idus.	18 calénd.	16 calénd.)	16 calénd.)
15	18 cal.	<i>idibus</i>	17 cal.	15 cal.	15 cal.
16	17 cal.	17 calénd.)	16 cal.	14 cal.	14 cal.
17	16 cal.	16 cal.	15 cal.	13 cal.	13 cal.
18	15 cal.	15 cal.	14 cal.	12 cal.	12 cal.
19	14 cal.	14 cal.	13 cal.	11 cal.	11 cal.
20	13 cal.	13 cal.	12 cal.	10 cal.	10 cal.
21	12 cal.	12 cal.	11 cal.	9 cal.	9 cal.
22	11 cal.	11 cal.	10 cal.	8 cal.	8 cal.
23	10 cal.	10 cal.	9 cal.	7 cal.	7 cal.
24	9 cal.	9 cal.	8 cal.	6 cal.	6 cal.
25	8 cal.	8 cal.	7 cal.	5 cal.	6 cal.
26	7 cal.	7 cal.	6 cal.	4 cal.	5 cal.
27	6 cal.	6 cal.	5 cal.	3 cal.	4 cal.
28	5 cal.	5 cal.	4 cal.	pridie cal.)	3 cal.
29	4 cal.	4 cal.	3 cal.		pridie cal.)
30	3 cal.	3 cal.	pridie cal.)		
31	pridie cal.)	pridie cal.)			

NOTA.—Los días de la semana se llamaban (*dies*) *Solis, Lunae, Martis, Mercurii, Jovis, Veneris, Saturni*. En ellenguaje eclesiástico: *Dominica, Feria, 2.ª, 3.ª, etc. Sabbatum*.

Penagos Luis, *Gramática Latina* (Biblioteca comillensis), Sal Terrae, Santander, 1970, p.8

古代ローマでは、ローマ数字を使ったはずだが、教育上アラビア数字にしたと思われる。